

主 題：私たちは同じ主を信じる②

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章11-17節

1コリント1章をお開きください。

きょう私たちは11節からみことばをご一緒に学んでまいります。先週10節を学びましたが、イエス・キリストの救いにあずかったひとりひとりが、教会の群れが一つになって歩むことを願っていました。それはまさにそのことこそが神のみこころだからです。

A. パウロの懇願 10節

私たちは10節で、救いにあずかった者たちが一致して主の栄光を現し続けていくために、パウロが四つのことを彼らに懇願しているメッセージを見ました。

1. 皆が「一致すること」
2. 「仲間割れしないこと」
3. 「同じ心」を完全に保つこと
4. 「同じ判断」を完全に保つこと

これがパウロがコリントの教会にまず願ったことでした。「一致する」ということばは「同じことを言う」という意味を持っています。パウロは、この教会の信仰者たちが同じ聖書的な真理に立って、同じ真理を語るように望んでいたのです。「一致すること」と「仲間割れしないこと」、この二つは教会のひとりひとりが聖書の真理に立って、同じ教理をしっかりと守っていくようにということです。なぜなら教会の中にいろいろな教えが存在したとしたら一致します？ですから神のみことばをしっかりと学んでそのみことばの真理にしっかりと立ち、すべての信仰者が私はこれを信じる、これが聖書が教えていることだと、そのことにおいて我々が一つになるようにということです。

後半の「同じ心」や「同じ判断」ということは、私たちは神様のみこころに関して同じ判断を持つことが必要だと。教会として、また個人として我々が求めているのは、私たちの願いごとがかなうことよりも神のみこころがなされることです。なぜなら神のみこころを通してのみ神の栄光が現されることを我々は知っているからです。ですから、ひとりひとりが信仰者として神のみこころを見出して、それに従って行く、そのようにして同じ心を持ちなさいと。そしてひとりひとりが同じ判断、つまり何が神のみこころなのかをしっかりと探り求めてそれに従っていくことだと。

最初は神の真理をしっかりと保つように、後半は神のみこころをしっかりと見出してそれに従っていくようにと、そういった一致をパウロはこのコリントの教会に願ったのです。ご存じのように、私たち信仰者にとって、神のみこころだけが最善です。明日何が起こるのか、これから先何が起こるのか知っているのは神です。その神様のみこころを私たちは求めながら生きることができる。イエス様を信じる前私たちは自分たちの考えと思いに沿って生きてきました。救いにあずかった私たちは今度は神の完全な知恵を求めながら、その導きに従って生きていくのです。

イザヤがこんなことを言います。「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」と。我々はベストだと思うことがいっぱいあります。これが最善だと思うことがいっぱいあります。でも本当の最善を、本当のベストをご存じなのは神です。私たちはこの方に信頼を置いて、この方のみこころを求めながら生きていくことができる。そんな新しい人生を送ることが私たちには赦されたのです。全知全能の神、創造主なるまことの神の導きをいただきながら私たちは歩いていくことができる、こんな特権に私たちはあずかったのです。私たちが個人としてそのように歩み、そして願わくば群れとしてそのような歩みをなしていくならば、パウロが願っていたように、そして神ご自身が望んでおられるような一致が私たちに生まれてくるのです。

◎ 神のみこころを見出す

ではどうしたら私たちは神様のみこころを見出すことができるのかを考えてみたいと思います。

一つ目に言えることは、私たちの考えや願い、私たちがしたいことをまずみことばに照らし合わせてみることです。このみことばこそが私たちにとってのルールブックだということを見てきました。ですから私たちは、このことについて神が何と言われているのか、みことばを見ることです。二つ目に言えることは、私たちを導いてくださる聖霊なる神様にすべてを明け渡すことです。案外私たちは何とかこれだけはかなえてほしいとなると、それは神様にお委ねしたくないと思います。なぜかという神様にお委ねして、ひょっとして神様がだめだと言われる可能性があると思うと、神様にお委ねしたくないのです。でもそれが間違っているのは、私たちの考えが神のみこころに勝っていると考えられるわけです。神のみ

こころが最善なのです。だから私たちは喜んですべてのものを神にお捧げして、主よ、どうかあなたのみこころを教えてくださいと祈るのです。私たちは自分の願いや自分の思いが主のみこころになることを願っているのではないのです。私たちは主の思いが私の思いとなるように、主の願いが私の願いとなることを主に願っているのです。ですからまずすべてを主に委ねることです。そして三つ目に言えることは、教会の霊的リーダー、主のみこころに従って歩んでおられる長老たちや執事たち、そういった人たちと相談して、この歩みが正しいのかどうかを尋ねてみることです。もしあなたが主のみこころを知り、みこころに従って歩んでいきたいと願っておられたら、神様は確実にあなたを導いてくださる。そうやって生きる時に我々も喜ぶだけではない、喜んでいただきたい神様が喜んでくださる。私たちはそうやって生きるのです。

B. 教会の実態 11-17節

さて、次にパウロはコリント教会の実態へと話を進めていきます。11節「**実はあなたがたのことをクロエの家の者から知らされました。兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるようで、**」とあります。パウロがこのコリント人への手紙を記した時に、パウロは今のトルコ、エペソにいました。そしてどうしてこのコリントの教会の内情を知ることができたのかというと、ここに書かれてあるように、「**クロエの家の者**」——これは複数になっているので「**クロエの家の者**」たちと言うことができるのですが、彼らから現状を聞いたのだと11節でパウロが記していました。この「**クロエ**」という人はこの箇所には出てこない人物で、どのような人かは確かに不明です。でもパウロ自身が非常に信頼を置いていた信仰者であることは言うまでもありません。なぜかという「**クロエの家の者**」たちからこの話を聞いた時にパウロはそれを疑わず信じています。そういうことから恐らく「**クロエの家の者**」たちは信頼に値する信仰者だったでしょう。

この「**クロエの家の者から知らされました**」の「**知らされ**」たという動詞は「**明白にする**」とか「**ことばではっきりさせる**」とか「**詳しい説明**」という意味があります。ですからこの「**家の者**」たちからコリント教会のいろいろなことを詳しく聞かせてもらったとパウロは言うのです。「**クロエの家の者**」たちがパウロに現状報告をしたのですが、これは告げ口ではなかったのです。私たちは結構告げ口が好きです。残念ながら我々の罪の性質がそういうことをさせるのです。現状を報告するのと告げ口とどこが違うのかという動機です。現状を報告するというのは、現状のありのままの姿、今の目の前の状態、その現状を正確に伝えていくものです。でも告げ口には悪意が含まれるのです。例えば、ある人の評判を台無しにしようとしたり、自分の抱く悪意を自分が告げる人にも共有させようといった意図が含まれたりする。ですから告げ口と言った時に、これは悪意を持ってなす行為ゆえにこれは神の前になしてはならない行為です。レビ19:16にこうあります。「**人々の間を歩き回って、人を中傷してはならない。**」、「**中傷**」というのは、「**誹謗**」であるとか「**悪口を言う**」ということです。「**人々の間を歩き回って、人を中傷してはならない。あなたの隣人の血を流そうとしてはならない。わたしは主である。**」と。ですから我々信仰者が口を開いて誰かのことを話す時に、決して私たちはその人たちの悪口を口にしてはならないと。悪い動機でもってだれかの話をしてはならない。そういうことから自分を守るために必要なことは、神に対するおそれです。私たちの口から出ることばもそうだし、私たちが考えることもそうだし、想像することもそうだし、そのすべては神の前に明らかです。神が私の思いをごらんになっておられる。神が私の思いを知っておられる。神が私のことばを聞いておられる。そのことを私たちがしっかりと覚えているならば、私たちのそういった言動はかなり注意を払ったものになることは言うまでもありません。

1. 存在した対立 12節

このクロエの家の者たちから、パウロはコリント教会の現状を知りました。どんな状態にあったのか、そのことが12節に記されています。実は教会の中に対立が存在していたのです。12節「**あなたがたはめいめいに、『私はパウロにつく。』『私はアポロに。』『私はケパに。』『私はキリストにつく。』**」と云っているということです。」と。これがまずパウロが聞いたことでした。つまり教会の中に党派が結成されていたのです。この「**私はパウロにつく**」と言った「**つく**」というのは、だれその仲間であるという意味です。つまり彼らは自分の好みでいろいろなグループを形成していたのです。だからパウロを愛するパウロ党、アポロを愛するアポロ党、ケパ(ケパというのはペテロのアラム語形です)を愛するペテロ党、そしてキリスト党という具合に、党派心を持った人々が教会の中に少なくとも四つのグループを形成していたのです。これを見ると、皆さんパウロもケパ、ペテロも、もちろんキリストのことも知っている。このアポロという人物は使徒18、19章に出てくるのですが、アレキサンドリア生まれのユダヤ人で、大変な雄弁家であり、また聖書に精通した人物であったと聖書は我々に教えてくれます。1コリント3:6にパウロが「**植えて、アポロが水を注**」いだと書かれているように、大変すばらしい信仰者でした。こんなことで教会の中が分裂し、争っていたということをパウロは知ったのです。

2. パウロによる矯正 13節

それを知ったパウロは彼らを矯正していこうとするのです。13節には三つの修辞疑問が出てきます。パウロはこの修辞疑問を使いながら彼らの間違いを正していこうとします。13節「キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。」この三つの疑問文の答えはすべてノーなのです。パウロはこの疑問をもって彼らの過ちに気づかせて正しく導いていこうとするのです。

1) 「キリストご自身について」

まずキリストご自身について、パウロは「キリストが分割されたのですか」と言います。答えは当然「いいえ、分割されていません」、「キリストはひとつ」です。だったらキリストのからだである教会も一つであるはずではないか、イエス・キリストを信じた者たちが一つであるはずではないか、なぜあなたたちの教会の中にそういうグループができていたのだとパウロは言うのです。

2) 「十字架について」

二つ目は十字架についてです。「あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか」、答えは当然「いいえ、私たちのために十字架につけられたのは主イエスさまです」となります。そこでパウロはだったらその主のために生きるのが私たちクリスチャンではないのかとチャレンジするのです。パウロはガラテヤ2：20で「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と語っています。イエス様の十字架を見上げる時に我々クリスチャンが何を思うか——。神に背を向けて生きてきたかつての私はあのイエス・キリストとともに十字架につけられ、かつての私は死んだのだ。そしてイエス・キリストがよみがえってきたように私も新しい者としてイエス様とともによみがえったのだと。

また、2コリント5：15でも「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」とあります。みことばは本当に明確に私たちに何をすべきなのか、どう生きるべきなのかを教えてください。「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるため」だと。クリスチャンというのは新しい目的を持って生きる者たちです。神に背を向けて生きてきた私たちが今度は神の方を向いて、神を愛してこの方に従っていこうとする、私たちはこの救いをいただくことによって、そんな新しい人生を歩むことが可能になったのです。ですから、私たちが自分に問いかけることは、私は一体だれのために生きているのかです。私は一体何のために、何を目的に生きているのかです。なぜ神様は私にこの新しい日を下さったのか——。神は私に何を期待しておられるのか——。私たちがそのことをみずから問いかけながら歩んでいるならば、どうかこの日、すべてのことをあなたの栄光のためになすことができるように、主よ、私を助けてください、そのような願いを持ってあなたは歩まれるはずですよ。なぜならそうやって生きる者として、我々は生まれ変わったのです。

3) 「バプテスマについて」

三つ目に出てきているのはバプテスマです。「あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。」とあります。当然答えは「いいえ、私たちは主イエス様の名によってバプテスマを受けました」です。だったら救われた者として罪から離れて、主がお喜びになる新しい歩みをするはずではないかとパウロが彼らにチャレンジするのです。

ローマ6：4を見てください。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」、私たちは新しい歩みをするために神によって救われたのです。あなたがこのすばらしい救いへと神によって招かれたのはあなたが新しい歩みをするためだと。ですから、パウロがこの4節で教えるように、「キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られた」と。私たちがするこの水のバプテスマは、救いにあずかったことを象徴しています。水のバプテスマが私たちが救うわけではありません。この水にそんな力はありません。私たちが水に浸るのは、神に逆らってきたかつての私はキリストとともに死んだことを象徴し、水から出てくることによって、私はキリストとともによみがえったのだと。既に神が私たちに与えてくださった救いのみわざを、その恵みを私たちは形をもって現したにすぎないのです。私はイエス様とともに死に、私はイエス様とともによみがえったのだ。だから私たちは新しい歩みをなすことができるのです。生まれ変わっていなければ私たちは新しい歩みをなすことができない。必ず限界にぶつかるのです。でもイエス・キリストの救いにあずかり、新しく造り変えていただいたのなら、私たちはその歩みをなすことができると。ですから、パウロはこのコリントの教会の人たちに対して、あなたたちはイエス・キリストによって、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けたのなら、罪から離れて主の前を正しく歩めと勧めたのです。

この教会の中でそれぞれが個人的な好みによっていろいろなグループを形成する。まさにこのような

姿は、パウロが1コリント3章で教えるように、肉に属する人々、クリスチャンとして非常に幼稚な人々の特徴なのです。まだ自分の好みで物事を判断し、自分の思いが自分の行動をコントロールするといった問題が存在していると。その上でパウロはどうあるべきなのかと彼らにチャレンジを与えたのです。

3. パウロの使命 14-17節

1) バプテスマを授けない理由 14-16節

その後、14-17節を見ると、ここにパウロ自身の使命が記されています。先ほどもお話ししたように、私はあの人が好きだとか、この人が嫌いだとか、彼らは人を見ていたのです。そこでパウロはあなたたちの目をもう一度神に向けてごらんなさいと言うのです。そのことをこの13節でパウロは彼らに働きかけるのです。その上で、パウロは自分についての説明を加えるのです。彼はこの14-16節になぜ私がバプテスマを授けないのか、その理由を説明します。なぜパウロがこんなことをしたかと言うと、パウロは人々が人間を見ていることに気づきました。同時に人々がパウロを特別視していたことを知っていたので、自分に向けられた目を神に向けようと彼は教えていくのです。

14-15節に「私は、クリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを授けたことがないことを感謝しています。それは、あなたがたが私の名によってバプテスマを受けたと言われなくするためにです。」とあります。まず、クリスポとガイオというふたりの人物が出てきます。クリスポというのは使徒18:8に出てきますが、会堂管理者で一家を挙げてイエス・キリストを信じた者です。ガイオというのはパウロやほかの人々を歓迎した人物です。恐らく彼の家が当初教会として用いられたのでしょう。パウロはこのふたりだけで、ほかの人々にバプテスマを授けていないことを神に感謝するのです。

その理由も書いています。15節「それは」とあります。だれもパウロの「名によってバプテスマを受けたと言わ」ないためだと。私はパウロの名によってバプテスマを受けたと言う人が教会の中にひとりもないことを願って、私はだれにもバプテスマを授けなかった、確かに例外はあるけれども。なぜかと言うと、15節を見ると「あなたがたが私の名によって」とあります。この「よって」という前置詞は、日本語では何となく誰がバプテスマを授けたのかぐらいに思うかもしれない。しかし「よって」と訳されているこのことばは「~の中に」とか「~の中へ」という意味を持っています。このことばの説明をパークレーが非常にうまくしているので聞いてください。「この~の名によってという言い方はギリシャ語では最も厳密な結合を意味している。兵士はカエザルの名によって忠誠を誓ったが、それは彼が絶対に皇帝の命令に従うことを意味するものであった。」と。つまりここで日本語で「よって」と訳されている前置詞はギリシャ語においては最も厳密な結合を意味していると。ローマにあって、ローマの兵士たちはシーザー（ラテン語ではカエサル、英語名はシーザー）の名によって忠誠を誓ったので、「シーザーの名によって」と言ったらシーザーに忠誠を誓うことになったのです。この名によって誓うということは彼が絶対に皇帝の命令に従うことを意味したのです。ですから私たちが考えるよりはるかにそこには重要な意味が含まれていたのです。そして「名によってという言い方は完全かつ絶対的な所有を意味している。」と続きます。とすれば、15節に「あなたがたが私の名によってバプテスマを受けた」と言うことは大きな過ちです。私はパウロに属するとか、私はパウロに忠誠を誓った、パウロと特別な関係に入ったと言うことになるのです。そんな過ちを誰しもが犯さないためにと。

そこであえてパウロは「あなたは誰の名によってバプテスマを受けたのですか」と言うのです。イエスの名によってバプテスマを受けたと言うことは、あなたはイエス様と特別な関係にあり、あなたはイエス・キリストに忠誠を誓ったのであり、この方の命令に従うこと、それがあなたの決心でしょうか？それがバプテスマです。儀式の一つに考えて、受けなければいけないのだろうと思って何となく受けるものではない。イエス様を信じて信仰に半分足を突っ込んで、バプテスマを受けて両足突っ込むのだと聞くことがあります。全く違います。イエス様を信じた瞬間に両足突っ込んだのです。我々がイエス様を信じると決心した時、イエス様は私の主であり、私の王であり、私はあなたに従うということを決心しました。それが私たちの誓いだったのです。

王はふたりしかいないのです。神なのかそれとも偽りの神、サタンなのかです。私たちはそのサタンの支配から完全に救い出されて、まことの神である主を受け入れてその方に仕える者になった。だから私たちがみことばを見た時に何度も何度も神がこのように行いなさいと、神の命令が記されているのは当たり前です。この方は私たちの主、神ですから。この方が私たちにこうなさいと命ずる、その権利を持っておられるのです。ですからここでパウロがもう一度私たちにも教えてくれるのです。イエスの名によってバプテスマを受けた私たちは、それがどういうことを意味するのかもう一度しっかり覚えなければいけないのです。もしあなたたちが私の名によってバプテスマを受けたとしたら私に忠誠を誓わなければいけない。でも違うでしょうか？と。パウロが言ったようにあなた方がバプテスマを受けたのは主イエスの名によってだとしたら、あなたはイエス・キリストに誓うという決心をし、この方に忠誠を誓うことを決心したと。ですからパウロは誰しもが間違っ、パウロの名によってと言わないように、あえてこ

のことをここに記して教えようとするのです。非常に大切なメッセージです。パウロがここでしたかったことは、間違ってもこんな誤解を誰しもが犯さないようにと。

そのことを語った上で、16節「私はステパナの家族にもバプテスマを授けましたが、そのほかはだれにも授けた覚えはありません。」と。なぜこんなことが記されているのだろうと思いませんか？このステパナの家族というのはパウロがギリシャ宣教を行った時に一番最初に救われた人たちでした。16:15にそのことが出てきます。この手紙は全部ある人物が口述筆記したもので、パウロはこのふたりだけだと確信して15節で語ったのです。もちろんパウロが記した手紙には節はありませんが、話が15節までいった時に、このふたりのほかにはバプテスマを授けた人がいないのだと、なぜ私はそういうことをしなかったかという誰しもが誤解しないためだと話をして、ちょっと待てよと、ステパナの家族にもバプテスマを授けたことを思い出すのです。だからそれを記しているのです。彼も私たちと同じ人間だったのです。こうして彼は忘れていたことを思い出して、ステパナの家族にも実は私はバプテスマを授けた、でもそれ以外にはないと。パウロでさえも物忘れをするのだとちょっとほっとしますよね。

2) 主からの使命 17節

さて、その後パウロは17節で彼自身が主からいただいた使命の話をして、17節「キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではなく、福音を宣べ伝えさせるためです。それも、キリストの十字架がむなしくならぬために、ことばの知恵によってはならないのです。」、パウロを神がお遣わしになるのですが、その目的を彼は語るのです。「キリストが私をお遣わしになった」の「遣わし」ということばは「使命を負わせて任地に遣わす」、「派遣する」という意味です。つまり目的を持って私はこの務めに遣わされたのだと。それは「バプテスマを授けさせるためではない」と彼が言います。17節の一番最初に「ではない」という否定語がつけられています。それからこの17節は始まるのです。「ではない」と言って、「キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではない」と。なぜ否定語を最初に持っていったかと言うと、神が私を遣わされたのはバプテスマを授けるためではないのだということを強調したかったのです。

「福音を宣べ伝えさせるためです」、これが目的だと言うのです。キリストの福音を伝えるために神は私を遣わしてくださったと。この務めには我々みんな遣わされているのです。もちろんひとりひとりには異なった賜物があります。でも出て行ってキリストの福音を語る、弟子を作るという責任はすべての信者に与えられている。これはあなたにも与えられている責任です。ですからパウロはその弟子を作るということに励んだのです。このコリントの教会を開拓したのはパウロでした。そしてパウロはここに1年半滞在して弟子を作ったのです。もちろんパウロが離れた後、この教会は非常に今悲しい状況にありますけれども、でもパウロはこの教会を愛して、この教会においてこういった働きをしたのです。

パウロは「福音を宣べ伝えさせる」という福音宣教という務めを神様からいただいたことを話した後で、この務めにおいてもパウロは兄弟たちの目を神の方に向けようとするのです。「それも、キリストの十字架がむなしくならぬためにことばの知恵によってはならないのです」と続きます。ここも最初に出てきていることばは「ならない」という否定語です。それを強調するのです。「キリストの十字架がむなしくならぬために」の「むなしく」というのは「無効にする」とか「無力にする」という意味です。パウロはこの福音宣教という働きについて「ことばの知恵によってはならない」と言います。もしそれをなすならばキリストの十字架が無力になってしまうということです。この働きを人間の知恵ではできないと言うのです。レオン・モリスという神学者は「十字架を忠実に宣べ伝えれば、聞く者はその信頼を人のわざではなく、神がキリストにあってなされたことに置くようになるであろう」と言っています。確かにパウロはコリントで働いたのです。宣教したのです。弟子を作ったのです。多くの者がこの救いにあずかったのです。パウロが言いたかったのは、彼がなした働きは、彼のわざではないということです。彼がしたことは、神の福音のメッセージをただ忠実に語っただけだと言うのです。彼は人が救われるために特別なテクニックを使ったのではないと。彼が語った福音は人間的な特別な知恵に基づいたのではないと。もし私たちがそういったものを使って語ったら、人々の目はキリストではなくてその語った人物に向けられてしまう。パウロが恐れたのはそのことだったのです。人を救いに導くという、この福音宣教というすばらしい働きにおいて称賛されるべきお方はただひとり神だけだと。私が人を救うのではない、神が救ってくださるのだと。信仰者であればみんな同じです。私たちの務めはキリストの福音のメッセージを、この救いのメッセージを忠実に正しく語ることです。

パウロが言いたいのは、私はそれをしただけだと。確かに彼は大変知恵があった人物です。律法についても人々から非難されるところのないようなユダヤ教徒でした。ですから彼が自分の人間的な知恵をもって人々に感動をもたらして、そして人々を説き伏せてこの救いに導くことは人間的に考えたら可能だったかもしれない。そう思ったかもしれない。でもパウロはそう思っていないのです。救いは神のわざだと。私たちがしたいことはこのキリストのすばらしさを人々に見てもらいたいのです。このイエ

ス・キリストがどんなに偉大なお方であるかを知ってもらいたいのです、私たちではないのです。我々は神によって使われている器にすぎないと。人々の目を彼にではなく神に向けようとするのです。自分の働きの報いは、称賛は、私ではなく、それを受けるのは神しかいない、この方だけなのだ。こうしてパウロは人々の目を神に向けようとするのです。特にこのようなことをパウロが強調しているのは、コリントの人々、つまりこのギリシャの人々というのは、人間の知恵や人の雄弁術、そういったものに対して高い関心と高い価値を置いていたからです。ですからパウロは言うのです。人間の知恵によって人間の話術によって私たちは人を救うことはできないと。救われるのは神のみわざであり、私たちの責任はこの救いのメッセージを忠実に語り続けていくことだと。ですからパウロに向けられている人々の目を神の方へ向けるようにと彼は導いていくのです。あなたたちが見なければいけないのは神なのだ。褒められなければならないのは私たちではなくて神だけなのだ。それは人々が人間を見ていたからです。そこでその目を神の方に向けようとパウロはするのです。

結論：

パウロはこのクロエの家の者たちからコリント教会の問題を聞きました。それを聞いて彼は何とかこの教会を助けようとするのです。そこでパウロは彼らの間違いを明らかにして、彼らに悔い改めを命じていこうとするのです。既に見てきたように、12節に彼らの問題を記していました。そしてこの問題についてパウロはこの1コリント3章の終わりまで記していきます。そして彼らの過ちを正していこうとするのです。コリント教会の問題というのはこれだけではなかったのです。5章になっていくとこの教会の近親相姦の問題が出てきます。しかも教会の問題はそのような罪に対して何も言わないという状態にあったのです。6章になるとクリスチャン同士が裁判で争い、6章の後半には不純な性行為が教会の中で行われていると。

SEE 10 節

こういったことに対して間違いを明らかにするために、10節をもう一度見てください。ここから始まったのです。パウロは「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって」と言うのです。パウロは二つのことを教えたかったのです。

① 主のみこころに反する

あなたたちがしていることは、主のみこころに反することだということを明らかにするのです。あなたたちの歩みは主のみこころに反することをやっている。あなたたちは間違っているということを明らかにするのです。

② 救いの目的に反する

二つ目に彼が言いたいことはあなたたちは救いにあずかっているながらその救いの目的に反することをやっている。

パウロはこうして彼らの罪を明らかにして、彼らがその罪を悔い改めて、もう一度神に立ち返ってくるようにと願うのです。これはクロエの家の者たちから現状を聞いて、コリントの教会の人たちを思い出して、あんなに一生懸命みことばを教えたのに、一年半も一緒に過ごしたのに、何てことだという憤りからパウロがこのようなことをしたのかと言うと、そうではなかったのです。1コリント4：14に彼自身がこのように記しています。「私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。」と彼らが間違った道を歩んでいるのを見て、それは間違っているということをお彼らに伝えようとした。なぜかと言うとパウロはコリントの兄弟姉妹たちのことを愛していたからです。

愛する兄弟姉妹たちが間違いを犯している、罪を犯しているのを見て見ぬ振りをしなかったのです。それは愛じゃないです。兄弟姉妹が罪を犯していたら私たちはそのことを指摘するのです。そして正しくあるようにと勧めるのが愛です。パウロはそのことを実際行ったのです。そういう友人を私たちは得たいですね。兄弟、あなたがやっていることは間違っていると。あなたの歩みは違うね、みこころに反しているねと。そういうことを本当に愛を持って語ってくれる人がいるならば、私たちは本当の友を得たのです。だってみんな我々はキリストにあって成長したいのです。そのためには、私たちの弱さを私たちの間違いを指摘されることが必要です。パウロは彼らを愛し、彼らが成長することを願っていた。そこで彼らの過ちをこうして指摘して、正しい道へと歩いていくように愛をもって彼らを諭していくのです。是非そんな信仰者に我々ひとりひとりがなりたいものです。励まし合いながら、助け合いながら、キリストにあって成長していく。なぜならそれを神が望んでおられるからです。どうか信仰者の皆さん、パウロのメッセージをもう一度心に刻んで、神が喜んでくださる信仰者として、神が喜んでくださる道をしっかりと歩いていきましょう。祈り合いながら、助け合いながら……。